

北海道の市民に聞く「包括的性教育」への期待と障壁

アンケートから見た家庭・地域のリアルと戸惑い

○アンケートの目的（回答者数：140件）

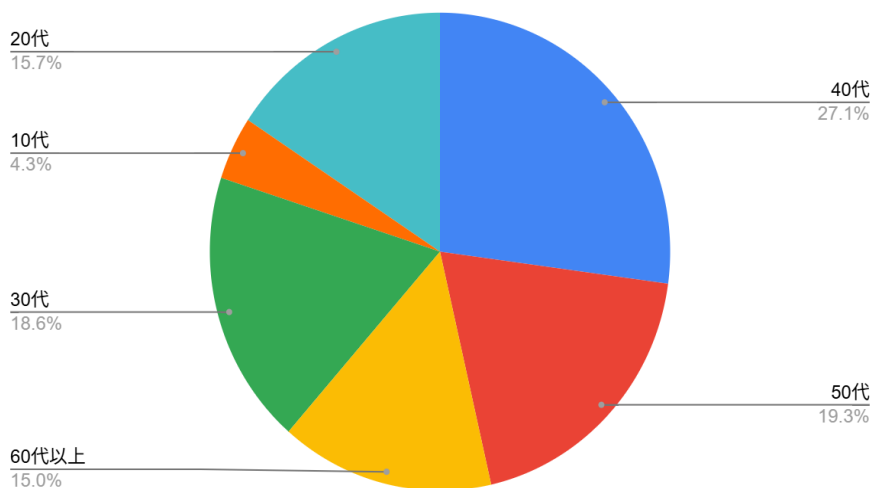
「包括的性教育」が市民の中でどれだけ認識されているのか、包括的性教育に関するどのような取り組みが必要とされているのか広く調査を行った。変化する社会の中で、大人自身が性教育をどう捉え、子どもたちを支える社会の土壌をどう耕していくべきか、市民一人ひとりの意識の現在地を明らかにしている。

※本アンケートはWebでの任意回答を中心としたため、特に関心の高い層の回答が多く含まれている。全市民の平均値を示すものではないが、「今、切実に課題を感じている人たちの声」としての重要性は極めて高いものと考えられる。

○回答者の居住地：札幌8割、その他地域2割

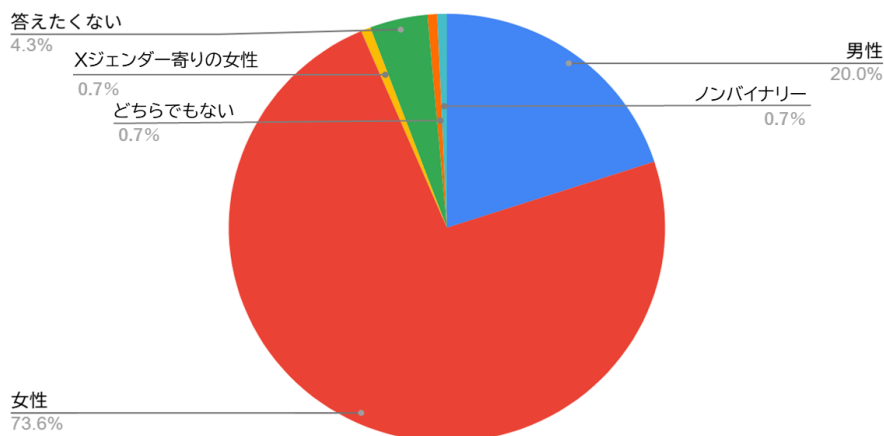
○回答者の年代

年代を教えてください



○回答者の自認する性別

あなたの性別を教えてください（※ここでの性別は自認している性別を指します）



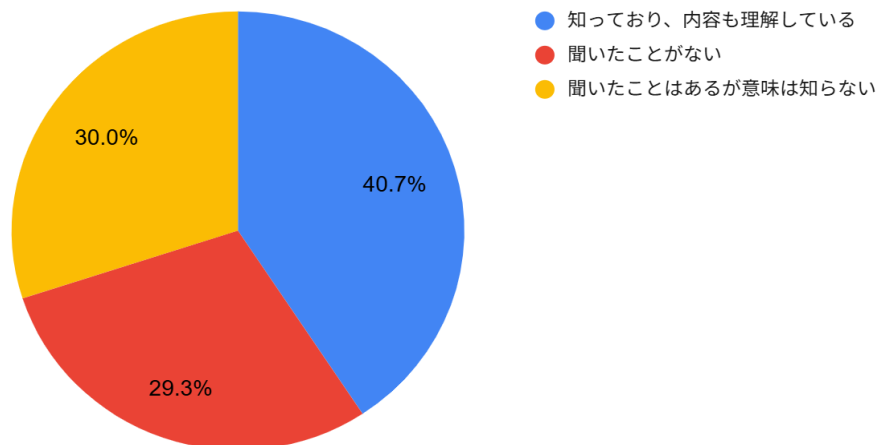
※回答者の7割強が女性を占めており、当事者意識の高さや関心がうかがえる。

年代は10代～60代以上まで、幅広い層からの回答があった。

また、回答者の過半数が「札幌市内」に集中しており、次いで「札幌市を除く石狩・空知・後志地方」が多くなっている。道内各地からの回答も拾い上げられてはいるものの、全体としては都市部を中心に情報が届きやすく、関心が集まりやすい傾向にあるといえる。

○「包括的性教育」の認知度

「包括的性教育」という言葉についてどれくらい知っていますか？



※年代が上がるごとに「聞いたことはあるが内容は知らない」の割合が増加。

■ 5. 「包括的性教育」の認知度							
選択肢	10代(6)	20代(22)	30代(26)	40代(38)	50代(27)	60代+(21)	全体計
知っており、内容も理解している	2 (33.3%)	3 (13.6%)	11 (42.3%)	21 (55.3%)	9 (33.3%)	11 (52.4%)	57
聞いたことはあるが意味は知らない	0 (0.0%)	9 (40.9%)	8 (30.8%)	9 (23.7%)	10 (37.0%)	6 (28.6%)	42
聞いたことがない	4 (66.7%)	10 (45.5%)	7 (26.9%)	8 (21.1%)	8 (29.6%)	4 (19.0%)	41

○回答者自身の知識の有無について

下記より選択式。

- ・性別による身体の構造の違いについて
- ・身体の自己決定について
- ・月経について
- ・射精について
- ・プライベートゾーン（プライベートパーツ）について
- ・妊娠や出産について
- ・性行為や性感染症、避妊について
- ・性的同意について
- ・性被害やその後の対応について
- ・デートDVについて
- ・性の多様性（LGBTQ）について
- ・ジェンダーについて
- ・無意識の偏見（アンコンシャスバイアス）について
- ・メディアリテラシーについて
- ・人間関係（恋愛、友情、家族関係）について

【考察】

・**身体の構造の違い、月経について**…回答者の7割以上が知識があると回答。生殖に関する知識は従来の保健体育などで社会的に一定水準で共有されているといえる。

「月経」は、日常生活や生き方に影響を与える大きな健康課題であることが考えられる。

・**射精**…「月経」に比べてほとんどの年代で50%以下と数値が低く、性教育において「男性側の身体現象」に関する正確な知識共有が手薄であると考えられる。加害・被害を防ぐためにも、男性側の身体現象と責任に関する教育の充実が求められる。

・**人間関係**…どの年代でも40%前後で、性教育を「知識」として捉えている層は多いものの、それを「対等な人間関係を築くためのスキル」として習得できている自認は、全世代で共通して低い可能性がある。

・**性被害やその後の対応**…知識があると答えた人は30%程度。相談先に関する情報や対応の知識が不足している可能性がある。相談先といった社会資源にアクセスする力の育成が求められ、具体的な支援の求め方についての教育の必要性が高い。「助けを求めることは権利である」ことが包括的性教育の核となる

○回答者がこれまで困ったこと

下記より選択式。

- ・性別による身体の構造の違いについて
- ・身体の自己決定について
- ・月経について
- ・射精について
- ・プライベートゾーン（プライベートパーツ）について
- ・妊娠や出産について
- ・性行為や性感染症、避妊について
- ・性的同意について
- ・性被害やその後の対応について
- ・デートDVについて
- ・性の多様性（LGBTQ）について
- ・ジェンダーについて
- ・無意識の偏見（アンコンシャスバイアス）について
- ・メディアリテラシーについて
- ・人間関係（恋愛、友情、家族関係）について

全体の7割以上が性に関して困った経験があると記載。

- ・若年層（10～20代）：SNSやネットを介した対人関係の境界線、周囲との距離感に潜むリスク。
- ・中間層（30～40代）：ライフイベント（妊娠・出産・育児）に伴うパートナーとの価値観のずれや職場での無意識の偏見による抑圧。
- ・シニア層（50代以上）：更年期等の身体変化への戸惑い、過去に受けた「不適切な扱い（セクハラ等）」を現在の視点で見つめなおしたときの傷つき。

【カテゴリー別】

① 性と生殖に関する健康と権利（SRHR）

自分の体について「知る機会」がなかったことや、心身の不調を周囲に相談しづらい環境があった。

- ・月経・月経前症候群（PMS）の悩み：月経痛や月経前症候群等による日常生活の支障について、職場や周囲に理解されない。ピルの副作用や受診のタイミングが分からず、一人で抱え込んでしまった。
- ・不妊治療・妊娠：長年にわたる不妊治療の精神的・肉体的負担。また、妊娠中のつわりに対してパートナーの理解が得られず、孤立感を感じた経験。
- ・若年層（10～20代）の不安：知識がないまま性交渉に至り、妊娠への不安から「生理が来るツボ」を友人と調べることにしかできなかった。予期せぬ妊娠をした際、相談できる大人がおらず、心身に深い傷を負った。

(記述より)

「10代のときに予期せぬ妊娠と中絶の経験があり、周りに相談できる人もいなく相手とも避妊について話し合いができていなかったなと思った」

「社会人になるまで、正しい月経の仕組みについてきちんと学ぶ機会がなく、生理不順だったのが病院に行くという判断に至らなかったし、通院してからも病院の先生への伝え方が困った」

「大きなイベントごとに生理がかぶってしまって、血が漏れてしまうのが心配でパフォーマンスに影響が出た」

「妊娠中の重いつわりや心身の不調に対してパートナーからの協力が得られず苦勞した。マイナートラブルも多く、実態に合った情報提供があったらよかった。」

②性的同意とパートナーシップ

対等な関係性を築くことの難しさや、自分の意思を尊重することの難しさ。

- **NOと言えない関係**： パートナーに対し、避妊の要望を伝えることが「はしたない」と感じたり、嫌われるのが怖くて拒否できなかった。
- **性的同意の誤解**： 「好きならして当然」という言葉に悩み、好意と行為への同意は別物であることをうまく説明できなかった。また、過去にメディア等の誤った知識から、相手に強引な行為を迫ってしまったという自省の声。
- **暴力・被害の経験**： 痴漢やつきまとい、あるいは身近な関係性の中での性暴力。相談窓口の「あなたは悪くない」という言葉に救われた経験。

(記述より)

「漫画で得た情報で、相手の真意や同意を十分に確認せずパートナーに性行為を迫ってしまったことがある」

「パートナーと対等な関係を築くことができず、NOと言えなかった」

「性的同意について、自分の気持ちをしっかりと尊重できない時もあったが、今はそれはよくない、と思い子どもへはきちんと伝えている」

「幼児期の性的被害について、身近な大人に相談しても親身に相談に乗ってくれなかった。」

③ジェンダーバイアスとアンコンシャスバイアス

家庭や職場、教育現場に根強く残る「男らしさ・女らしさ」の押し付け。

- **家庭内の役割分業**： 家事育児の負担が女性側に偏り、それが「当たり前」とされる環境への違和感。
- **職場・社会の壁**： 「お茶出しは女性」「力仕事やトラブル対応は男性」といった固定観念。会議の場などで女性委員の意見が「うるさい」と軽んじられる風潮。
- **子どもへの制約**： 「女の子なんだから」という言葉や、性別による制服の制限、色の固定観念が、子どもの可能性を狭めているのではないかという危惧。

(記述より)

「学校での管理職を含めた教職員のジェンダーバランスを適正化することが求められていると思う。逆に女性が働けない働きたくない職場というのが学校であるならば、改善されるべきではあると思う。」

「夫婦ともにフルタイムで働いているにもかかわらず、「女性だから」という理由で家事や育児の負担が偏っていて、不満がある」

「暴力的な利用者は男性社員が対応すべきという風潮がある」

④性的指向・性自認の多様性

「異性愛・結婚・出産」が前提の社会の中で、透明化されたり傷ついた。

- ・ **カミングアウトの障壁**： 親に同性愛者であることを伝えられず、結婚のプレッシャーに苦しむ。
- ・ **無意識の加害**： かつてLGBTQ+の方を笑いのネタにしたり、傷つけたりしたかもしれないという後悔と、今の社会の理解不足へのもどかしさ。
- ・ **教育の遅れ**： 教科書の記述が「異性を意識する」といった異性愛前提のままであり、悩んでいる子どもたちを取り残している現状。

(記述より)

「家族からの「結婚しないのか」という異性婚を前提とした問いかけにカミングアウトできず苦悩したことがある」

「身体的性別を理由に希望する服装や行動をとれないことがあった。」

「女性から告白されたときに自分の性的対象がわからなくなったことがある」

「LGBTQ+当事者であるため、世間一般の異性愛を前提とした恋愛関係の話題に共感できず、疎外感や違和感を抱いた」

○学校教育における包括的性教育の実施

8つのキーコンセプト、すべて僅差で学校教育において充実させる必要があるとの回答が集まった。

特に「性的同意」「性行為や性感染症、避妊」「プライベートゾーン」「性被害やその後の対応」など、他者や相手との関係性において起こり得る性的リスクに対する教育の充実を8割以上の回答者が求めている。このことは、一方で性的リスクに直面する懸念の大きさを間接的に示していると考えられる。正しい知識を教える教育とともに、自分と相手の身を守り、尊重し合うための実践的な教育への転換が求められているといえる。

また、はじめて規定により、性交について言及することが認められていない小・中学校学習指導要領による学習内容では、子どもたちが直面する現実との乖離について指摘されている。リスクから子どもが自分自身を守るためにも、義務教育における適切な発達段階において、具体的な避妊方法まで教えるべきだという「健康教育」への期待の強さがうかがえた。

(記述より)

「学校の教育の中で伝えていくことももちろん大切だと思うが、家庭の中で伝えていくことで

深まっていくものももちろんあると思うので、包括的性教育について全体の意識が高まっていたらいいなと思う。」

「性教育を何歳から始めるか、どのような教育が必要かは、学校だけでなく家庭や子どもが利用する公共施設と一緒に考える機会があると良いと感じる。」

「学校教育以外でも中高大学生が簡単に、フランクに性の情報にアクセスできて、かつ居場所になるような場所があればとてもいいと思う。」

「正しい知識を伝え、多様性を大事にする環境が必要だと思う。保護者や地域と協力し、安心して相談できるようにしたい。」

〇おわりに

北海道に暮らす市民の多くが、今の子どもたちを取り巻く性の課題に強い危機感を抱き、「包括的性教育」の必要性を切実に感じているという事実がアンケートから見えてきた。

大人たち自身が、「当時はだれにも言えなかった」「今も一人で抱えている」という孤立感や、7割以上が困難に直面しながらも、相談先や解決策を見いだせていない現状は、包括的性教育が「からだの知識」にとどまらず、「助けを求める権利」や「社会的な相談体制」の構築の重要性を示唆しているといえる。

性教育を「学校だけの役割」に閉じ込めないためには、私たち大人がまず、自分たちの中にある心理的な障壁やタブー視する空気に向き合わなければならない。学校現場が抱える孤独な葛藤を、社会全体の課題として受け止め、大人が学び直しの勇気を持つこと。それが、子どもたちが自分らしく、安全に生きていける環境を耕す第一歩となるのではないか。